

# 音 楽 科

徳 田 典 子  
本 多 春 奈

## 1 音楽科における「よりよい未来を志向する子」

私たちは、日常生活の様々な場面で音や音楽にふれる機会をもっている。そして、音楽は私たちの感性を刺激し、生活に豊かさや潤いを与えてくれている。学校教育における音楽科でも、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わったりする力を育成することを大切にし、生涯にわたって音楽文化に親しむための素地を養ってきた。

新学習指導要領では、音楽科で育成をめざす資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力」と明示している。生活や社会の中で音や音楽がどのように役立ち、自分とかがかかわっているか、学んだことがどのように生活や社会の中の音や音楽とつながっているか、子どもが興味・関心をもって探求できるような指導が求められている。

そこで、本校音楽科では、音楽に豊かにかかわっていくために「音楽的な見方・考え方」を意識させる。音楽を一方的な見方や感じ方でとらえるのではなく、その中にある様々な要素や仕組みを聴き取ったり感じ取ったりし、それらが音楽に与える効果や影響について理解させる。そして、自分たちの演奏や音楽づくりに生かしていくことを大切にする。また、学校での学びだけではなく、生活や社会の音や音楽とも結び付けることで、さらに豊かな音楽とのかかわり方ができる子どもの育成をめざしていく。

以上のことから、音楽科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえた。

- ・音や音楽に目を向け そのはたらきについて気付こうとして学習を積み重ねていく子
- ・音や音楽を通して 通じ合い 響き合い 共に創り合う体験から 自分の表現方法を明らかにしていく子
- ・今までの学習を生かして 生活や社会の音や音楽と豊かにかかわっていく子

## 2 音楽科における決める授業デザイン

音楽科の授業で子どもは様々な音や音楽にふれ、自分たちの音楽の幅を広げていく。歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の領域や分野において、思考・判断・表現する一連の過程を大切にしながら学習を充実させることで、子どもはどんな力がついてきたかを実感し、次の学びにつなげていくことができる。

「音や音楽に目を向け、そのはたらきについて気付く」とは、楽曲を構成する様々な音楽的要素に目を向け、そのはたらきが音楽に与える効果や影響について理解することととらえる。音楽の学習では、子どもは様々な楽曲を通して、音楽的要素と音楽との関係について学び、音楽を表現したり、鑑賞したりする経験を積み重ねる。この経験が、多種多様な音楽に出会ったとき音楽がもっているよさに気付くことにもつながり、どのような視点で音楽を聴いたり表現したりするのかを決める力になっていく。

同じ音楽でも、人によって様々な感じ方やとらえ方があり、その表現方法も多様である。音楽科の授業では、個人での思考や表現だけではなく、ペアやグループでの協働を大切に、新しい気付きや音楽の見方にふれる経験を積み重ねる。そして、音楽に対する考え方を広げ、感性豊かに表現する姿をめざしていく。子どもはグループで音楽表現を練り上げていく過程で、「こっちの方がいいかな。」「思いを伝えるには、この音をつかうとよさそうだ。」など、それぞれの表現について伝え合い、一つの音楽にまとめていく。様々な考えや表現方法を知り、それを試していくことによって、自分の思いに合った表現方法を明らかにすることができ、どのように表現するかを決めることにつながっていく。

音楽科では、生涯にわたって音楽に親しんでいくために、音楽に積極的にかかわり、豊かな

感性で音楽に向き合おうとする姿をめざしている。そのためには、学校教育の音楽科だけではなく、生活や社会の音や音楽にも視野を広げ、世の中の様々な音楽に主体的にかかわろうとする意欲を育てていくことが大切である。子どもの音や音楽への興味・関心が高まることで、様々な音楽とのかかわり方を決めることができるようになり、生活や社会の中の多様な音楽への関心を高めることにもつながっていく。また、普段なら聴き流してしまうような音楽に対しても、立ち止まって耳を傾けようとする豊かな音楽性を育むことができる。このような学びを積み重ねることで、子どもの感性や音楽性は豊かなものとなり、学校のみならず、自分たちの生活や社会の音や音楽への興味・関心へと広がっていく。そして、子どもが生涯にわたって音楽に親しんでいくための素地となっていく。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

新しい教材との出会いは、子どもにとって学びの第一歩である。子どもの意欲や学びへの原動力を喚起するきっかけとして、教材となる楽曲や学習材との出会いを大切にする。そして、これまでに聴いたことのない音や音楽に出会うことで感性を刺激し、「面白そうだ」「演奏してみたい」といった意欲につなげていきたい。

初めての教材や学習材に向き合う子どもは期待感に満ち、音楽との向き合い方や、アプローチの仕方、表現方法や題材に対し意欲をもって臨んでいる。子どもと教材との出会いの場が、学習全体の見通しをもつための場となるよう意識し、子どもが、この題材の終わりに「どんな力がつくか」「どんな表現ができるようになるか」などの自分の姿を想像することができる導入を行う。そのために教材の内容を吟味し、この題材を通してどんな表現をめざし、どんな力をつけていくのかを明らかにする。そして、様々な楽曲や学習材を通して、音楽的要素が楽曲に与える効果や影響について学ぶ経験を積み重ねる。このような学びの中で、子どもは自分で選択し、自分の思いを音にしたり、友達と協働したりしながら音を音楽に構成していく経験を重ね、豊かな感性を育むことができると考える。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

多様な視点から課題を追求していくために、ペアやグループ活動を適宜取り入れていくことを大切にする。また、活動の形態を工夫することで、一人一人が思いを伝え合い、考えを広げ、豊かな表現につなげていくことができるようにする。さらに、子どもが協働して学びを深めていくために、工夫の視点を絞るなどの条件設定をする。「反復」をつかう、「強弱」を工夫する等、視点がはっきりすることで何を工夫すればよいのか明確になり、思いや意図を伝え合いながら、つくり上げたものをふくらませたり、練り上げたりしていくことができる。

多様な学習形態の中で課題を追求・検討し、子どもが様々な発想を働かせながら音楽に取り組むことで、共につくり上げる喜びを感じられるようにしたい。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

ふりかえりはこれまでの自分の学びを確認し、次の学びにつなげていくためのものである。音楽科では、形態を工夫したり、機会をとらえてふり返らせたりすることにより、これからの自分に生かしていくことのできるふりかえりを行っていく。

ふりかえりの場では、自分の音楽がどのように変容してきたか、この題材を通してどんな力がついてきたか、次の題材でもっと伸ばしていきたいことは何かなど、次の学びにつながっていくような意識をもたせる。例えば、題材の初めと終わりに録音したものを聴き比べることで、自分の成長を実感することができ、次の学びへの意欲をもたせることができる。また、ディスカッションや、ワークシートの記述によるふりかえりなど、それぞれの活動に合わせたふりかえりを行うことで学びを確認し、豊かな音楽的感性を育てていく。この力が音や音楽に積極的にかかわろうとする姿勢にもつながり、生活や社会の音や音楽に豊かにかかわっていく子どもの育成につながっていくと考える。

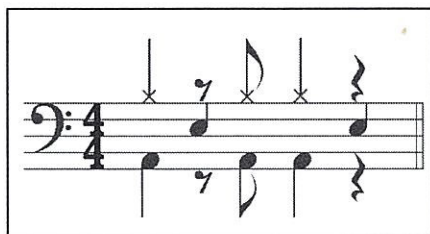
## (1) 学びの原動力を形成する「決める」

## 5年「ストロークテクニックを磨こう」の実践から

子どもはあこがれの楽器やときめく演奏に出会ったとき、「かっこいいなあ」「すてきだな」「演奏してみたい」などその魅力を素直に表現する。本題材では子どものあこがれの楽器であるドラムセットを学習材とし、存分に楽器に触れ、演奏させることを通して、ドラムセットのもつ様々な魅力を体感させ、より豊かな表現に結び付けていくことをねらった。



資料1 スティックコントロールに取り組み姿



資料2 考案したリズムパターン

はじめに、ドラムセットにある様々な楽器のもつ固有の音色やその響きの特性を理解させるために、教師による範奏を聴かせた。子どもは手足をフルに使うドラム演奏の範奏から、これからの自分たちの姿を想像することができたであろう。はじめてドラムに取り組む子どもは、「かっこよく演奏してみたい」と意欲に満ち溢れている。これからの学習の中で課題意識をもってドラム演奏の仕方を工夫させるために、奏法など様々な基本を身に付ける必要がある。そこで、教師が考案したドラムセットと見立てた練習板を教具として使い、スティックコントロールやドラムの奏法などの基本・基本を授業の導入時に実施して積み重ねていくことにした(資料1)。

ドラムセットは大小さまざまなドラムやシンバルなどの打楽器を一人の奏者が演奏することができる楽器である。特にベースドラムの奏法については、ドラム演奏の要であり拍の軸となる。しかも、足でペダルをキックして演奏することもあり、導入時に奏法の基本を身に付けることが肝心だと考えた。そこで、ドラムのパターン演奏の導入は、どの子どもも演奏が可能にするために、右手のハイハットをベースドラムと同じリズム型とした簡易なパターン

を考案し提示した(資料2)。このパターンは子どもの実態に即したものであり、導入時でもほとんどの子どもが楽しんで奏法を習得することができる。また、ドラムをくり返し練習するために使用する楽曲はEガールズの「クルクル」とした。選曲の理由としては、音楽の構造がわかりやすく、旋律の反復の仕方が聴き取りやすいので、子どもに無理なくパターン演奏をできると判断した。この曲はイギリスのバナナラマの曲をカバーしたもので、曲想が明るくアップテンポであるという演奏効果からもドラム演奏の楽しさが期待できると考えた。歌詞の内容も子どもに親しみやすく、明るくポジティブで落ち込んでいる人を励ましてくれるメッセージソングである点にも着目した。

A児は練習をくり返すがなかなか正しくペダルのキックができず、パターン演奏にまとまることが出ない。そこで教師の働きかけによって、学級みんながA児の演奏にしっかりと耳を傾けることで、そこから感じ取ったことをもとに子ども同士の交流をさせたいと考えた。B児は、A児のドラムの奏法をみるや否や「Aさんのハイハット、スネアドラム、ベースドラムやドラムスティックの扱い方をべつべつに見る必要があるから手伝って。」とA児のそばにいき、つまずきを解消させるために学級の友達に応援を求めた。その後、たくさん子どもがドラムの周りに集まり、それぞれ見る観点を絞ってアドバイスをくり返した。また、A児はC児からの「ベースドラムから足を離したらダメだよ。」というアドバイスに反応し、よう

やくベースドラムの奏法に意識を集中させた。やがてパターン演奏が完成してくると、B児やアドバイスをしていた友達から「やったあ。」と喜びの声があがり、A児の演奏がゴールに達成したことで学級のみんなが一斉に拍手をした(資料3)。

子どもはドラムセットという学習材との出会いにより感性が刺激されたことで、音や言葉によるコミュニケーションが活性化した。また、「ドラムを上手く演奏したい」という音楽表現に仲間と取り組み、ドラムの響きを共有する喜びを味わうことでおのずと協働で友達の課題を自分事として積極的に解決することができた。学びの原動力を促進するには、技能の土台をそろえる必要がある。そのためには、ねらいに近づく上で鍵となり得る子どもからの気づきを他の子どもに共有させることが有効だと感じる。また、このことは子どもが今後どのように演奏することが望ましいのかについて自分の姿を想像する場であり、学習全体の見通しをもつために欠かせない場の設定だと考える。

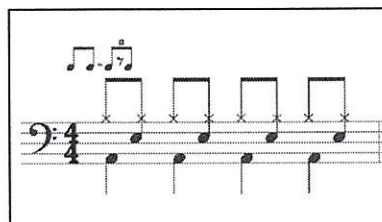


資料3 A児のドラム演奏の支援をする姿

## (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

### 6年「ドラムを使って ビートテクニックを磨こう」の実践から

本題材では、デキシードジャズスタイルの「聖者の行進」のデジタルコンテンツの範奏の音源を教材とし、ドラムの働きに気付かせ、曲全体のドラム演奏の構成を工夫する学習を設定した。はじめに、曲の構成を確認させるために楽曲のチャート譜を見せて範奏をくり返し聴き取らせた。次に、子どもにより具体的なドラム演奏の仕方をイメージさせるために、簡単なリズムパターンを提示した(資料4)。



資料4 提示したリズムパターン

また多様な視点から課題を追求させるために、子どもを12名構成のグループ活動とした。演奏はドラムセットを2台使用し、12名のメンバー全員を組み合わせる。また、フィルイン(ドラムセットにおける演奏技法)の表示のある箇所はその部分の曲想に合う演奏を考えて表現するという条件設定を提示した。さらに拡大チャート譜は、ドラム演奏を構想するために誰がどの部分を演奏するか、また、どの打楽器と組み合わせで演奏するかなどを書き込むことで共有し、可視化するための手だてとした(資料5)。Aグループでは、特に、バンジョーやトランペットのソロのある中間部はどのような奏法でまとめたらいいのかを話し合っていた(資料6)。D児は



資料5 チャート譜をもとに構想する姿

- D児：ソロの部分はアドリブの演奏を引き立てるようにしようよ。  
 E児：それならベースドラムだけで演奏するのはどう？  
 リーダー：バンジョーもトランペットの部分も全部をベースドラムだけに？  
 F児：それって盛り上がらないな。  
 G児：じゃあ、バンジョーでベースのみでトランペットはシンバルを入れたら音色が変わっていいと思う。  
 リーダー：でも、トランペットのソロ部分は16小節あるし長いよ。  
 E児：A “のところはバンジョーが主旋律のテーマの演奏だから、そこからベースの演奏を8小節して次にハイハットとベースの組み合わせにするのは？”  
 D児：じゃあ、トランペットのところも同じくりかえしにするといいと思うな。  
 リーダー：それでは、試し演奏をしてから決めよう。

資料6 ソロの部分のドラムの構成を話し合う様子

曲全体をとらえて、アドリブ演奏のある中間部をどのような表現にするかが大切だと判断して提案した。チャート譜を見ると8小節からなるテーマが5箇所あり、ソロが入る中間部のアドリブは何回もくり返されるテーマとは表現が一味違うという判断からである。また、D児は範奏の聴き取りからこの部分のドラム演奏はバンジョーやトランペットのサウンドが引き立つように構成されていることに気付いていた。よってドラム演奏は少し控えめな方がソロの演奏が引き立つという考えをもっていた。そこで、中間部は提示されたリズムを参考にしてベースドラムのみで演奏する8小節とスネアドラムとベースドラムの重なりを演奏する8小節を交互に演奏する方法を提案した。



資料7 フィルインを考える姿

次にドラムセットの各楽器の音を試して、どのようなフィルインを入れたらよいかを考えさせた。ドラムセットは特色ある楽器の集合体である。子どもは試しの演奏で各ドラムの音やシンバルの豪快さを感じながら、この曲にふさわしい表現についてイメージをふくらませていた。1拍や2拍、または1小節のフィルインなど、ドラムのもついろいろな音の響きやそれらを組み合わせた特徴を生かした表現を追求した(資料7)。その後全体のまとまりを意識した演奏をするために、誰がどの部分を演奏するのかを話し合い、演奏の構成をまとめた。本題材の演奏の課題では、12名の一人一人が途切れないようにドラム演奏をするという条件設定がある。だが子どもの音楽の技能には、個人差がある。協働で演奏する場合、その問題を理解し合うことで、仲間と同じ目標にむかって創り出す力が育まれていくと考える。E児は、提示されたパターンを演奏できない。そこで、

Bグループのメンバーはその様子を見て、E児が自信をもって演奏できるベースドラムのみの構成を取り入れた。ところが何度演奏しても拍がずれる。グループのメンバーはE児に手拍子を打って、拍がずれないように支援したことが演奏に有効に働いた。本題材では共通の条件設定を与えたことで、各グループの表現の違いがドラム演奏を通じてはっきりと表出された。また、子どもはまとめの表現においてグループのメンバーの連結から生まれてくるドラム演奏の表情に躍動感を感じていた。

### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

#### 5年「ストロークテクニックを磨こう」の実践から

本題材では、ワークシートの記述によるふりかえりを行った。ここでのふりかえりの目的は二つある。一つ目は教師にとって本題材の導入での手だてが、子どもにとって学習全体の見通しをもつために有効に働いたかを検証することである。特に第1次のドラムセットの演奏の導入では、教師による範奏を行い、奏法やリズムパターンの提示をした。その出会わせ方は子どもの学びへの原動力となり、自分の姿を想像することができたのかを確認するものである。二つ目は、子どもにとっては、この学習過程をふり返って、どんな音楽の力がついてきたのかを見つめ直すことである。

- ・最初は先生のドラムの演奏を見て「すごいなあ」「カッコいいな」というあこがれと同時に「私がこんなむずかしいことができるのかな?」と思っていました。今は自分なりに演奏ができるようになりうれしいです。今やっている演奏が終わったら、次は何をやるのが楽しみです。(H児)
- ・ドラムセットで演奏してみてもすごく楽しかったです。最初はBDを上手く演奏することができず困っていましたが、先生からBD(ベースドラム)を練習してからSD(スネアドラム)を入れて練習したらいいとアドバイスをもらいました。そうすると、BDの音を土台にしてあっという間に8ビートを演奏することができました。BDはドラムにとってすごく大事だと実感しました。最近になってドラムがもっともっと楽しく感じられてきました。(I児)

資料8 ふりかえりのワークシートの記述

H児のふりかえりには、導入時における範奏のことが書かれていた。「私がこんなむずかしいことができるのかな？」とあるように、これからの不安とともに自分の姿を想像していたことがうかがえる。また学習過程を終えたとき、これまでの学びを確認し、ドラムの演奏ができるようになったことを喜んでいる。I児のふりかえりでは、演奏をする過程で常に課題意識をもって取り組んできたことが伝わる。BDがドラム演奏にとって要であることを意識し、学習に取り組んでいる内に教師からのアドバイスによって、演奏のコツを習得したとある。そのことで、この学習のよさやおもしろさを実感している(資料8)。

ふりかえりには、子どもが技能を習得したという実感から見えてきた新たな気づきやそのことから得た視点をさらに自分の表現に更新している様子が見られた。また、自分を客観的に見つめ、学習が深化したことを気付かせることでより成果を実感し、次なる活動への意欲が促進されると感じた。

## 成果と課題

子ども同士が「心の結び付き」を実感するような協働学習はどのような授業デザインを試みたらよいのかという課題を常に抱き、授業を構想してきた。教師は実施した授業に対して、子どもがどのように感じているのかを認識し、授業デザインをよりよく改善していく必要があると感じている。

そこで、本研究の実践にかかわる検証として、手だて(2)による6年の題材「ドラムを使ってビートテクニックを磨こう」の学習のふりかえりとして、授業後にアンケートによる意識調査を実施した。設問1「授業では12～13人での協働学習をしましたが、グループで取り組む表現のよさを教えてください」では、大きく分けて次の3点についての回答があった。1点目は、グループで取り組むことによって、仲間のいろいろな意見が聞け、一人では思ってもみなかったアイデアを得ることができる。2点目は一人一人のもっている良さを合わせることで複数で演奏する方がさらに良い演奏になる。3点目は演奏表現があまり得意でない人がいても、仲間のアドバイスなどで助け合えるであった。次に設問3「デキシーランドジャズスタイル『聖者の行進』を演奏して、この題材は楽しめましたか?」の意識調査では、6年112名中110名が楽しめたという肯定的な意識があることがわかった。わけとしては、曲がジャズスタイルでリズムにのれて楽しめたこと、また学習材であるドラムセットで演奏ができ、表現の工夫に挑戦できたことが挙げられた。新学習指導要領によると、高学年の子どもは多様な楽器の音色や演奏の仕方についての興味・関心が高まる傾向が見られるとある。本実践の手だて(1)で意識した学びの原動力を形成するという観点に着目すると、学習材のドラムセットやデキシーランドジャズスタイルの音楽を選曲して提示したことが、そのよさを表現したいという能動的な心の働きにつながったと考える。次に、手だて(2)による学習形態としてグループ活動を取り入れたことであるが、子どもの意識調査によるとグループのメンバーが互いに受容的な雰囲気をつくりながら、課題に対する具体的な方策を考えて表現できたという点で有効に働いた。手だて(3)では、今までの学びをふり返るために記述のワークシートやアンケートによる意識調査を実施した。それによると、子どもはふり返ることで今までの学習の深化や自己の成長を確認していた。ふり返る機会を与えることは、子どもの内省的な感情や思考を整え、学習の習得や定着の機会となり、次のステップへの基盤をつくることになると感じた。また、ふりかえりのデザインをすることは、子どもが何をのぞんでいるのかが明らかになり、より子どもの学びを理解することになると痛感した。

今後の課題としては、今までの実践の成果を踏まえ、子どもの心の内側に向かって働いていることを子どもによる表現やふりかえりなどからとらえ、自身がめざす「心の結び付き」という人と人を結び付ける機能を内包した音楽学習のための授業を構想したいと考えている。

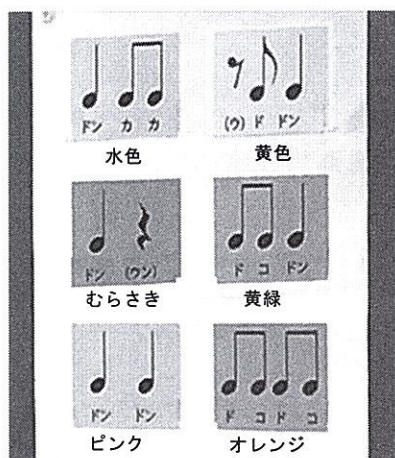
(1) 学びの原動力を形成する「決める」

2年「おまつりの音楽をつくろう」の実践から

本題材ではテーマを「おまつりの音楽」とし、リズムを組み合わせることでお祭りのイメージに合う「たいこのリズム」をつくる活動に取り組んだ。お祭りは地域に根付いた行事であり、子どもが身近なものとして親しみをもつことができる。授業の中でも、子どもは地域のお祭りや県内の様々なお祭りの様子や雰囲気を出しながら、これから始まる学習に期待感をもつことができると考えた。また、お祭りの写真や太鼓の写真を提示することで、全員がお祭りのイメージを共有できると予想した。

学習の過程では和太鼓を準備し、一人一人が考えたリズムを打つことにした。子どもは、迫力ある太鼓の響きを体感することで「たいこのリズム」づくりへの興味がさらに高まった。

基本的な音符の音価や名前などは、昨年度からの積み重ねや音楽の授業でのリズム読み、リズム打ちで学習してきたこともあり、子どもは抵抗感なくリズムを使うことができた。そこで、「タン・タ・タ」を「ドン・カ・カ」のように太鼓の音で読み替えたリズムカードを提示することで、子どもはさらにお祭りのイメージをふくらませることができ、リズムの組み合わせを楽しむ様子が見られた。

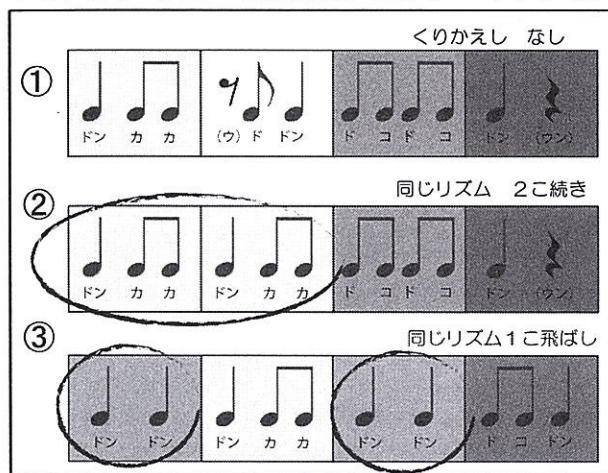


資料1 色を変えたリズムカード

リズムづくりでは、「ドンカカ」「(ウ) ドドン」「ドン (ウン)」「ドコドン」「ドンドン」「ドコドコ」の6種類のリズムカードを組み合わせることで、お祭りの太鼓のリズムをつくる活動に取り組んだ。子どもは、お祭りの様子を想起しながら思い思いにカードを並べ、自分の好きなリズムや、弾んだリズムを入れて、いろいろなリズムの組み合わせを試していた。また、リズムごとにカードの色を変えたことで、リズムの違いや並び方が視覚的にもわかりやすくなり、子どもの思考の手助けとなった。友達のリズムと見比べたときにも、同じリズムや違うリズムが一目でわかり、交流の幅が広がった(資料1)。

リズムカードを使って並べ替えながら組み合わせを試すようにしたこと、リズムカードの色を工夫したことは、子どもの音楽づくりの過程で有効な手だてであった。

次に、本題材ではまとまりのある音楽をつくらせたいと考えた。まとまりのある音楽をつくるには、音楽の構成要素である「くりかえし」をつかうことが有効だと考える。そこで、

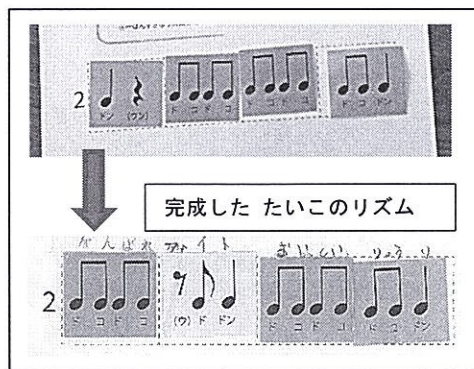


資料2 試してできたリズムパターン

音楽づくり活動の中で子どもが試した組み合わせの中から、①くりかえしなし、②同じリズムを2こ続けるくりかえし、③同じリズム1こ飛ばしのくりかえし、この3パターンのリズムの組み合わせを取り上げ、全体に広めることにした(資料2)。三つの例を見ながらリズムを聴き比べさせることで、子どもからは「くりかえしをつかうと、まとまった感じがする。」等のつぶやきが聞かれ、「くりかえし」をつかってリズムを組み合わせることの効果について実感することができた。子

どもは、「まとまったリズム」をつくるためのスキルとして「くりかえし」を試しながら自分のイメージに合うたいこのリズムを考えることができた。また、一目でくりかえしのパターンがわかることから、色を変えたリズムカードは、くりかえしを考える際にも子どもの思考の助けとなった（資料3）。

また、お祭りの様子を想起するための写真や本物の和太鼓でお祭りのイメージを広げたことで、子どもは意欲をもって学習に取り組むことができた。



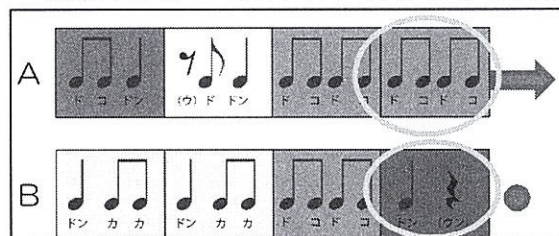
資料3 組み合わせ方の変容

## (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

### 2年「おまつりの音楽をつくろう」の実践から

「たいこのリズム」づくりの学習では、各自がリズムを組み合わせた後にグループでリズムをつなぎ、「～はんのおまつりの音楽」をつくる活動を行った。まず、各自が持っているお祭りのイメージを一つにまとめ、グループのイメージを明確にしてから組み合わせを考えられるようにした。活動の導入では、どんなお祭りの音楽にするのか話し合わせ、各グループで「楽しいおまつり」「にぎやかでわくわくするおまつり」などのイメージを共有できるようにした。つなげ方を考える際には、イメージに合うだけでなく、まとまりのあるリズムになるよう組み合わせることを意識させた。漠然としたイメージでリズムを組み合わせるのではなく、どうしてこの順番でつないだのかなど、思いや意図をもって組み合わせることを大切にしたいと考えた。そこで、順番を考える際の手

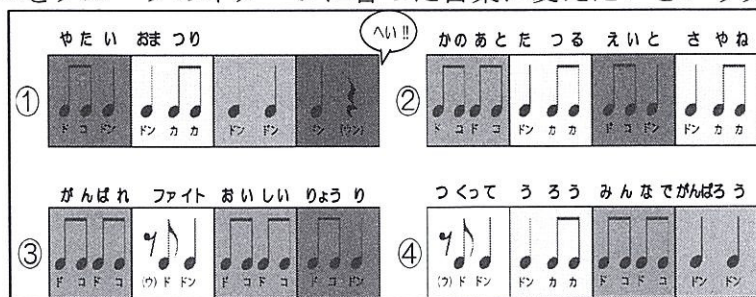
がかりとして、リズムのつなぎ目に着目させることにした。リズムを見る際には、続く感じのリズム、終わる感じのリズムはどれかと問いかけ、リズムの形に注目させた。子どもは、Aのリズムのように8分音符で終わっているものは「続く感じのリズム」、Bのリズムのように終わりに休符がついているものは「終わる感じのリズム」と気付いていた（資料4）。



資料4 続くリズムと終わるリズム

グループの話し合いでも、「ドコドコやドンカカのリズムが最後に来ると続く感じがする。」「最後にウンがくると終わった感じがする。」「似たリズムのものを続けて演奏するとまとまりそうだ。」等、リズムに注目して組み合わせを工夫する姿が見られた。

また、リズムの組み合わせだけでなく、音楽をイメージに近づけるために「わっしょい」「そーれ」「そいや」などの「合いの手」を入れることを助言した。子どもからは、「ドンドン」「ドンカカ」などの太鼓のリズムをグループのイメージに合った言葉に変えたいという発言も聞かれた。自分たちのお祭りのイメージと音楽をつなげるために、決められたリズムに合う言葉を探し、試行錯誤を重ねる様子が見られた。Aグループでは「楽しいおまつり」をイメージし、屋台が出ていて楽しくにぎやかな様子を言葉や合いの手で表現していた。自分たちがつくったリズム



資料5 Aグループで合いの手や言葉を工夫したおまつりのリズム（数字は演奏順）

にはどの言葉が合うか、いろいろな言葉を試し、「やたい」「りょうり」等の言葉を組み合わせ、イメージを音楽につなげる工夫をしていた（資料5）。



他にも、「合いの手」「言葉の工夫」だけでなく、リズムと合いの手の分担を工夫して「呼びかけと答え」のように合いの手を入れるなど、工夫の幅を広げているグループもあった。

リズムを組み合わせるための視点、合いの手や言葉の工夫、これらの手立ては、自分たちのイメージをより具体化するために効果的であった。

### 3年「明るい歌声をひびかせよう ー茶つみー」の実践から

歌唱表現では、楽曲を構成する様々な音楽的要素を頼りに、根拠をもって自分の表現方法を構築していくことを大切にする。「茶つみ」は、休符から始まるリズムや拍の流れが特徴的な楽曲である。また、同じリズムや旋律をくり返していることから、楽曲の特徴をとらえやすく、表現の工夫にも取り組みやすいと考えた。本題材では、音楽的要素の中から特に「歌詞」を手がかりに表現の工夫をすることを大切にした。「歌詞」の内容を楽曲全体の音楽的要素と結び付けることで、無理なく豊かな音楽表現につなげられると考えた。

まず導入では、全体で楽曲の特徴をとらえる時間を持ち、子どもに「歌詞」「リズム」「速さ」などの曲の特徴に気付かせることで、どのように表現すると曲のよさが伝わるかを考えさせた。子どもからは、「休符やリズムを大事にして歌う。」「楽しそうな感じで歌う。」「音が高くなっていくところで強弱の工夫をする。」等、音楽の構成要素に気付く発言は聞かれたが、



資料7 茶つみワークシート

「～な様子を伝えるため、こんな風に歌い方を工夫する。」のように、歌の情景や自分が感じたことと気付いたことをつなげて考える子どもはあまりいなかった。そこで、「歌詞」の表す情景に着目させるために問い返しを入れ、表面上の記号だけでなく、歌詞の表す様子と音楽的要素を結び付けた豊かな表現につなげたいと考えた。子どもの「ゆったりした感じで歌う。」の発言には、「どうしてゆったりした感じで歌いたい？」

と教師が問い返し、「お茶をのんびり摘んでいる感じを伝えたいから。」という考えにつなげた。適宜問い返しを入れることで、音楽的要素とつなげて考えることを意識するようになった（資料7）。

グループでは各自が考えた歌い方の工夫について話し合い、グループの歌い方にまとめる活動を行った。グループで話し合うことによって、「摘めよ 摘め摘め～、の部分はお茶を摘みたいって意思がはっきりしてるからクレッシェンドにするんだね。」「八十八夜の、はちやの部分弾んで歌うと、お茶を楽しそうに摘んでいる感じになるよ。」「お茶をつむようにゆっくり歌うとよさそうだ。」等、どうしてこんな工夫をするのか、音楽的要素と自分の思いをつなげて考えるよさに気付く子どもが増えてきた。実際の表現も、学習の最初の方では表現の幅が狭かったのに対し、まとめの発表会ではグループごとに強弱やフレーズ感を考えながら歌うことができた。また、グループ発表後の感想交流でも、音楽的要素と曲のイメージとをつなげて感想を伝える姿が見られるようになった（資料8）。

- ・Aはなが「夏も近づく～」のところをクレッシェンドにしている、夏がせまってきたという気持ちが伝わってきました（A児）。
- ・「八十八夜」のところはずんで歌っていたので、茶つみの楽しそうな様子が分かりました（B児）。

資料8 グループ発表の感想

### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

#### 2年「おまつりの音楽をつくろう」の実践から

学習のまとめとして、「おまつりの音楽」発表会を行った。発表会では、グループで試行錯

誤しながらつくってきたお祭りの音楽を聴き合った（資料9）。

まとめのふりかえりでは、①自分の工夫のこと、②グループの工夫のこと、③他のグループの演奏を聴いて感じたこと、この三つの視点でふりかえりを行った。子どものワークシートからは、自分のイメージとリズムとを結び付けて工夫ができたことや、リズムの特徴を考えながら組み合わせを工夫していたことが書かれていた。また、合いの手や言葉をどのように工夫するかなど、グループ交流で深め合ったことも書かれていた。他のグループのよい工夫についても、発表会の中でたくさんみつけて伝え合うことができた（資料10）。発表会の子どもの姿やまとめのふりかえりからは、イメージと音楽をつなげるために試行錯誤してきた様子や自分たちの音楽をつくった達成感、グループで協力して音楽をまとめることができた充実感が感じられた。また、ふりかえりの観点を設けたことで、自分、グループ、他のグループと比べながら、音を音楽へと構成していくための工夫に気付くことができた。



資料9 発表会で工夫を伝える様子

- ・ぼくは「つづくリズム」と「終わるリズム」をくらべて、ならべました。（C児）
- ・ぼくは、はずむようなイメージにしたいので、はずむリズムをつかいました。（D児）
- ・はんでつくるときに、合いの手を「ウン」のところに入れると、はんにのぎやかなイメージになるなと思いました。（E児）
- ・わたしはさいしょに「ソーレ」を入れました。そうすると、はんの人たちがいきおいをつけられるのでおまつりのイメージに合うと思いました。（F児）
- ・リズムのことばを一人が言って、二人が手でリズムをたたくのがいい考えだなと思いました。（G児）

資料10 視点①、②、③のふりかえり

## 成果と課題

子どもが主体的に「決める」授業にするためには、どんな子どもでも音楽に興味関心をもち、積極的にかかわりたくなる授業の工夫が必要となる。子どもに身近なものを題材としたことや、誰でも容易に音楽づくりに取り組むことができるような教具の工夫をしたことで、子どもは主体的に音楽にかかわり、様々な工夫を試し、自分の音楽をつくることができた。また、交流の場ではグループの多様な視点から考えを広げ、自分たちの思いを音楽に表すことにつながった。課題としては、「気付いたこと」と「感じたこと」とがうまくつながらない子どもがいることである。子どもは楽曲を聴いて、「明るい感じがする。」と言うことはできる。この段階から音楽的要素につなげ、「明るい響きの楽器の音がたくさん聴こえてきて、楽しく踊っている感じがする。」のように、自分が感じたことの根拠に音楽的要素をつかうことができる姿をめざしたい。感じたことと音楽的要素をつなげて考えることで、これまで気付かなかった聴き方ができるようになり、音楽の聴き方がさらに豊かなものになる。この力が今後音楽に積極的にかかわっていくための素地となってくると考える。

ふりかえりの場ではこれまでの自分をふり返ってできたことを確認し、次はこんなことをしたい、と意欲につながっている記述も見られた。また、全体交流の発表会で友達に認められたことに達成感をもち、次の学習に対する意欲を見せている子どももいた。2年生の実践では、題材のまとめとしてふりかえりを行ったことで、達成感や充実感をもった子どもの様子はわかったが、題材を通しての様子や、思考の変遷を見取ることはできなかった。子どもは毎時間のふりかえりを積み重ねることで、自身の学習の履歴を確認し、自分の成長を実感することができる。また、題材を通してのふりかえりシートを使うことで、学習の見通しをもつことにもつながる。次の時間にはこれまでの学びの何を生かすことができそうか、題材のまとめには何ができるようになるか、見通しをもつことで学びにつながり、活動への取り組み方もより積極的になったのではないかと考える。学習の形態や習熟度に合わせたふりかえりについて、さらに吟味していく必要があると感じた。ふりかえりが一時のものにならず、積み重なっていくことで豊かな音楽的感性の育成へとつながるようにしたい。